
この町で君に出会い

雨宮竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この町で君に出会い

【コード】

N2085D

【作者名】

雨宮竜

【あらすじ】

佐瀬町に引っ越してきた引っ込み思案の佐上緋亜。この町で自分
は変わることができるのか

プロローグ

桜前線が新聞に載り始めた日だった。私は最低限の荷造りを終える。今日この部屋を出て、新しい町へ引っ越すのだ。引越しの理由は単に、>新しい自分探しくをするため。そして、自分の実力を新しいところで、新しい人に逢って知るため。

その新しく私の行く町の名前は佐瀬町。佐瀬町は、昔ながらの家が沢山あるところだが、近頃都市に近いことが注目されて、高層マンションが立ち並ぶようになったところだ。別に、交通手段だって今では沢山あるし、今の町に比べれば、狭さも感じず、息苦しさも少しは感じなくなるだろう。

私は、腕時計を見てから「遅れてる」と一言呟き、荷物を持って立ち上がった。

プロローグ（後書き）

まだまだ初心者ですがよろしく願いします

第2話：出会い

予定より、はるかに遅い午後5時に、佐上^{サカミチア}緋亜は新しく住むマンションに着いた。マンションは、いかにも清楚なイメージがあつて、引っ込み思案の彼女には余り合わない、自分でも言っていたところだが、新しい生活にはもってこいの気がする。

「佐上さんの部屋は1405室でしたよね」

引越し業者の人は、ダンボールを二つ重ねて持ちながら問う。「は、はい……。そうですよ。ありがとうございます」

14階は、階段で上がるには無理ということで、緋亜はエレベーターのボタンを押した。隣は、さっき問いかけられた、業者の人だ。顔を下に向けた。なんだか、知らない人と一緒にいるのは、感情がむずむずして仕方が無い。そう思っているうちに、エレベーターが一階に来ていた。中には一人乗っている人がいて、緋亜は思わず顔を上げた。一体、どんな人がここに住んでいるんだろう。

降りて来たのは、男性だった。カッコいいスーツ姿に、凛々しい眼差し。ただ、身長は150センチの彼女を追い越すか追い越さないかぐらいだ。

「……こ、んにちは」

詰まってしまった。

「こんにちは」

彼は笑顔で返してさっさとその場を去ってしまう。あの人は私のことをどう思ったんだろう？ 悪いイメージじゃなかったかな？ 名前は何て言うんだろう……。緋亜は心の中で呟く。そして、エレベーターに乗り込んだ。

緋亜は家についてすぐ、隣の家の人たちに挨拶をしようと思った。業者さんがうまいから、ダンボールが部屋中に散乱していなかったのだ。

部屋は合計で5つある。一人で住むには多すぎるぐらいだろうが、趣味のピアノを置くための防音が装備されている部屋、生活するための部屋、寝室、仕事部屋（使う理由性はほばないけど）ぐらいに分けられてしまう。

リビングにはもう、テーブルと二つの椅子が並べてあった。リビングの中で、ちゃんとした状態で置いてある家具は、その二つしかなくてなんだか寂しそうな感じがする。

「はいはい。早く帰ってきて、他の家具も出すからね」

彼女は家具に話しかけていた。家具にも、魂があって感情があつて、この世界にいる価値がある。緋亜はそうやって昔から思っているのだ。

「じゃあ。行つてきます」

緋亜は部屋から出て行つた。そして、隣の1406号室へ向かい、チャイムを鳴らした。『どちら様でしょうか』向こう側から声がすくにした。

「初めまして。私、1405室に引っ越してきた佐上と申します。良ければお顔だけでもご拝見してもいいでしょうか」

出来る限り丁寧に、そして詰まらない様に。『はい。いいですよ』

この人はいい方だ！ 心の中で、叫んだ。

「初めまして。高野美咲コウノミサキです。よろしくね、佐上さん」

玄関が開いた。高野美咲と名乗る女性は、長く帯のような黒髪の似合う人だった。

「こちらこそ。よろしくお願ひします！」

緋亜が返事をする、「では」と言つて、美咲はドアを閉じた。

次は、1404室の人だ。軽い足取りで玄関に向かい、チャイムを押した。が、返答が無い。

「留守なのかな……？」

もう一度鳴らして見る。……やっぱり返答が無い。きつと留守なんだろう。でも、どこに行っているんだろう。それとも、会社勤めの人なのだろうか？

「明日の朝、もう一度……」
緋亜はそう考えてから、自分の家に戻った。

第3話：再会

4月3日、1404室のチャイムを押した。昨日押したときは誰も出なかった。そして、15秒ほど待つていたが、返答は無い。頭に血が上りそうだった。

「何で居ないの？」

つい、心の叫びが出てしまった緋亜は赤面になった。

「何で昨日もいなかったのに今日も居ないわけ？ この人可笑しいよ！ 夜勤でもしてるわけ？ もう、嫌になっちゃう！」

彼女はドアを平手で叩いた。痛いのに、強く強く叩く。そこに、誰かがやってきた。

「おい、お前……」

男性の声だ。緋亜は振り向いた。少し顔を下に傾けた所為で、男性の顔は見れなかった。

「俺のドアに何をした」

「あつ……さっきのは……」

緋亜はそういいながら手を伏せ、顔を上げた。男性の顔には、見覚えがある。スーツ姿に同じぐらいの身長、そう、この男性は着いてから会った、一番初めの人だった。

「あつ、あの」

緋亜は彼に近寄った。「昨日の夕方会った方ですよ？ 覚えてます？ 私、隣に引越してきた佐上緋亜です！ 良かったら、あなたのお名前をお伺いできますか？」

一気に言った。彼は少し退いた様だったが、少し眠そうな顔をしないで、質問に答えてくれた。

「俺の名前は高橋寛タカハシヒロ。緋亜っていうんだよな……変わった名前。まあ俺、そういうの好きだけど。それとさ、ごめん。俺、あんまり昨日のこと覚えてない。ワリイな、でもこれからよろしく」

寛は手を差し出した。緋亜は、手を握った。寛の手は大きくて、

「いかにも男性だな」と思わせるような感じがした。そして、温もりを感じる。

「変わった名前ですか？ 別に自分では気に入ってるんですよ、緋亜っていうのは。寛さん、これからお願いしますね！」

少し、昨日のことを覚えていないのは、緋亜にとって辛かったけど、自分のことを覚えてくれたのは、嬉しい。

寛は、髪を掻いた。掻いたところが、ぐしゃっとなる。「俺、夜勤だったから寝てもいいか？」そう言って、緋亜をさした。どけ、ということなんだろう。

すいません。そう言って退いただけだった。でも、寛の顔は笑っているようだった。眠そうじゃない、いや、あえて眠そうな顔をしていないのかもしれない。

「おやすみなさい」

「ああ。緋亜は行ってらっしゃいか？」

「あつ、そうです。バイトですけど……就職はまだなんです」

少し、照れてるような顔をした。はっきり言って、ぜんぜん照れるところではない。

私は、周りに比べると遅かった。行動、成長、そのほかのすべてが。就職は、一体いつできるんだろう。同窓会で、自分だけニートとかは絶対に嫌だ。

「じゃ、バイバイ」

「バイバイ」

二人は手を振り合った。

緋亜は寛が家に戻った後、少しその場で呆気に取られていた。なんで自分があんなに話せたのか。恥ずかしさはなかったのか……恥ずかしさはあったのだ。心の中に。でも、その感情が顔に表れなかった。いや、寛の話し方が友達のように、表れる時間が無かったのではないか。そう考えると、寛は自分にとって、すごくありがたい人のように思えた。

「行こう」

終止符を打つ。もう、考え出したら止まらない症は、どうしても抑えきれない。でも、それが出るといことは、やっぱり、寛が凄すぎるのだ。ふと、握った手を見た。そこだけ、感覚が変わったよ
うな感じがする。

「バカか。私は」

自分で自分を責めた。ケータイがあることを確かめる。「今日は
どういううハプニングがあるのかなー？」と言ってみた。ハプニン
グなんて起こらないほうがいいのに、どういことを考えてるんだ
と、緋亜は自分の考えたことを否定する。

足を、エレベーターに向かって歩かせる。さあ、バイトに行こう。

第4話：寛の思い

4月20日。緋亜がバイト帰りの帰路に着いたときだった。

辺りは夜で、薄暗く、時には蛍光灯があるのについでいない道路だつてあつた。そんな道を一人、彼女はポツポツ歩いている。後ろから、足音がした。緋亜の歩くペースより大幅に速い足音は、すぐに彼女の近くにまで忍び寄っている。そして、丁度後ろ、又は横というところで、足音が重なった。

何この人……。変な人。逃げよう。緋亜はそう思つて、一段と早く歩こうとした。が、その時。誰かに肩を掴まれた。

「ひゃっ！」

思わず、裏声が出てしまう。掴んでいる手は大きい。男性だ。

「俺のこと、分かるか？」

「ひ、寛さん……？」

緋亜は声を頼りに、自分の知っている人を答えた。「当たり前」

寛は、緋亜の前に出る。薄暗い蛍光灯でも、顔がはっきり見えた。

そこで、一息つく。

「ビックリしたじゃないですか。こんな夜に、いきなり肩を掴むなんて」

「悪かつたよ。でも、こんな薄暗いところを歩いてるからいけないんだつて。俺がもし、殺人犯とか、強盗犯だったら、緋亜を見つけたら『なあ、嬢ちゃん。怪我したくなかったら、一緒についてきな』とか言つて、お前を連れてくぜ？」

「だつて、この道が一番あの家に近いんですよ。それに、殺人犯とかはそんなこと言わずにさっさと私を連れてっちゃうんじゃないですか？」

顔を見合わせて彼らは笑つた。こんなところで、なぜか淡々と話してしまう二人。

緋亜はそこで気づく。なぜここに、寛がいるのか？ ということ

に。「なんでこんな時間にしかもこの場所を通っているんですか？」
聞いてみた。

「あっ、俺？ 俺は今日、飲み会行かずに帰ってきたわけ。で、駅から大通りを歩いてたら、見覚えのある人が横切ってたと思って、つい、追っっちゃったわけ。そしたら、緋亜だったと」

寛は通ってきた道を指しながら答えた。

「追ってきたって、ストーカーですね」

その一言に、寛は傷ついたのだらうか。「それは……」と言って、黙り込んでしまった。

「寛さんも、帰りなんですよね？ 一緒に帰りましょうよ」

二人は横に並んで歩き出した。

と言っても、寛はさっきの言葉で傷付いているせいで、喋ることはなかった。

緋亜は少しだけ視線をあげた。寛は視線を少し下げた。二人の視線がぶつかり合う。

「っ……」

寛は顔に手を当てる。二人は視線を元に戻した。

「なんなの？ 今の。」

緋亜が心の中で叫ぶ。

「なんで俺の顔、見るんだよ……。」

寛が心の中で呟いた。

「さっきの、すいません」

「……何が？」

寛は手を外す。緋亜は、寛が喋ってくれるとは思ってなくて、少し戸惑った。彼の顔には少し、顔が赤くなっていた跡があった。

「ストーカーって言ったの……」

「あ、そのことが。俺はてっきり……」

寛は語尾を濁した。「てっきりなんですか？」

「なんでもない。聞かなかったことにしといて」

分かったよ。ただ、そういうしか緋亜には出来なかった。相手の

心の中まで、人は見ることは出来ないのだから。

「ありがと。ちょっと俺見て」

緋亜は寛の言うとおりに、彼を見た。そのときだった。波のように押し寄せてくる感情が生まれたのは。

……………。心が熱い。

「何するの？」

「ん？ じゃあ、まず目をつぶって……………」

寛の息がだんだん近くで聞こえるようになってくる。鼓動が早くなってきた。そして、もつと熱くなる心……………。

一瞬、寛の唇が触れたような気がした。

「やっぱり無理」

寛は緋亜から離れた。

「ねえ、何をしようとしたの？」

「……………ほっとけ」

「ほっとけじゃないよ！ 知りたいんだから！」

「……………しょうがねえなあ。一回だけだぞ」

寛は手を伸ばし、緋亜の体を引き寄せた。

「えっ」

緋亜の顔が赤くなる。寛の手が腰にまわる。顔が近くなる。「ここで……………」息が途切れる。緋亜は寛の顔が近すぎて、倒れそうだった。

「キスしようとした」

二人の唇が触れ合うという瞬間で、寛は顔を戻し、代わりに緋亜を抱きしめた。

「えっ！ 寛さん……………」

緋亜はどうしようか迷っていたが、自分からも、抱きしめた。

「俺、緋亜のこと好きなのかもしれない」

「ありえないと思うよ。だって、まだ会ってから一ヶ月も経ってない」

二人はまだ、抱き合っている。

「時間なんて関係ないよ。もしかしたら俺、会ったときから好きだったのかもしれない」

緋亜はわかっていない。この言葉が告白だということ。

「ありがとう、寛さん。でも私、好きっていう感情が良く分からないし、まだこの町に来たばかりだし、寛さんのこと全然知らない。もうちょっとだけ、好きになるには時間が要りそう」

緋亜は寛の手を外した。二人の体が離れてゆく。

「ごめん……なさい」

緋亜は目をそらして言う。寛を直視できなかった。

第5話：揺れる心

あの告白から、一ヶ月が経とうとしていた。あの日から、二人は各自相手を避けるようになった。怖いのか、恐れているのか、気まぐずなのか。どうしようもないことだけど、二人は顔を合わすことが出来なくなった。

もうすぐ、憂鬱な梅雨の季節になる。雨の日には、寛には会えない。緋亜は心の中で呟いた。会いたいののに会おうとしない自分もどかしく感じる。

さすがに、自分の部屋は片付いていた。

ベランダに出てみる。空は夜の所為で、漆黒の闇になっていた。

星は見えそうだが、マンションの灯りや、黒い雲で見えない。そのとき、左隣の1406室の窓が開いた音がした。緋亜が寄っていくと、美咲さんが立っていた。「美咲さん。こんばんは」

「こんばんは、佐上さん。偶然ね」

「そうですね」

一瞬、なぜか寛の顔が目映る。寛はこんなふうに、女性と話すのだろうか。緋亜はため息を漏らした。

「ため息、何かあった？」

美咲は緋亜の漏らしたため息を見逃さなかった。

「あつ……」

口には出来ない。告白された。ましてや、1404室の寛だなんて。言えるはずがない。

「言えるはずが、ないです」

「なんで？ 恋バナ？」

美咲は怖い人だ。なんで、人の心を読み取れるのだろう。

「言えません！ 絶対に」

私は体の前でバツ印を作った。美咲は笑う。

「時間は何も、対処してくれないわよ。対処してくれるのは、相手

と自分の感情だけ。がんばって」

美咲は笑った。緋亜は、美咲の言葉の意味が分からずにいた。このことだけは、時間が対処してくれると考えたい。いや、対処して欲しい。

じゃあ、バイバイ。美咲はそう言って、帰って行った。

緋亜は空を眺めながら自分に問いかける。自分は今、寛のことをどう思っているのか。好きなんていう、感情は分からない。知らないのかもしれない。もしかしたら、好きなのかも知れない。分からなかった。でも、今の自分は、自分に嘘をついていない。

「感情」

一言、口に出してみた。今まで、感情なんてことをちゃんと考えたことがあっただろうか。

「ちゃんと言ったほうがいいのかなあ？」

心に問いかけてみた。

寛とは、前のようにこれからも接していききたい。だけど、色々なことを知りたい。ただの甘えだろうか？

それでもいい。

「もう少し、自分の感情がはっきり区別されるようになるまで時間をとりたい」

自分が出した、答えだ。それでも、寛を傷ついたらどうしようもない。自分の未熟さに、杭を打とう。

揺れる心の中で、緋亜は確かな答えを持った。

寛に言おう。ちゃんと言って、適応な距離を置こう。

第5話・揺れる心（後書き）

良かったら、評価してくださいね

第6話：言葉

もう、梅雨になったのだろうか。突然、雨が降り出した。緋亜は、提げていたバックから折り畳み傘を取り出し、差す。

広げた傘に、雨粒があたり、弾ける。

ポツ、ポツ。バチャ、バチャ。

水溜りの中に靴が入っていた。なぜ、こういう日に限って革の靴なのだろう。最悪だ。

服まで、湿ってきた。

「冷たいなあ……………」

顔をしかめる。

「早く帰ろう」

バイト帰り。今日はあまり、稼ぐことは出来なかった。本当に、最悪だ。

ポツ、ポツ。バチャ、バチャ。

止まない雨。止まない音。

ビチャ、ビチャ。コツ、コツ。

緋亜の足音も、雨の所為で乱れている。

「……………最悪」

呟いた。タクシーでも使おうか？ いや、歩いて帰ったほうが近いし、基本料金を払うだけ無駄だ。頭の中で考える。結論的には、雨に濡れても構わないのだ。

電灯の明かりが、朦朧もつろつとなっている。大通りから小道に入ると、すれ違う人が一人や二人になった。

その時、あの日のことを思い出す。

……………寛と小道であった時のことを。

「逢いたがってんの？ バカみたい。来るはずない……………よ……………」

自分に問い、自分で答えを出し、自分で自分を傷付ける。語尾はかすかな音としかならず、自分でも何を発したのか分からなくなっ

た。

足を止めた。自分の見ている世界が一瞬静止する。

「いつまでも、夢見てる場合じゃ……ない……よ、ね？」

誰かに答えを聞いて欲しい。誰かに、この悲しさ、辛さを受け渡したい。

傘を持っていた手が震えだす。悲しさ、辛さ、自分に対する怒り。なぜ、私はこんなに感情が無茶苦茶なの？ 手の震えが止まらなくなる。

とうとう、傘が地面に落ちてしまった。

雨粒が緋亜の体を浸食しようとする。緋亜は、そんなことはお構いなしになった。さっきまで、最悪と思っていた自分とはまるで違う。

この雨と一緒に、私も雨になってしまえばいいのに。

人という存在に、会わなくてもいい世界に行ければいいのに。

「どうかしましたか？」

不意に、落とした傘を差し出された。傘を受け取り、雨をしのぐ。今の声は、聞き覚えのある寛のものだ。まさかと思つて、相手の顔を見た。……やはり、寛だった。

「ごめんなさい……」

寛も、緋亜だということを気づいたのだろう。返す言葉を見失っている。「まだ、私のこと少しでも、好きですか？」尋ねてみた。

「……そうだと言ったら？」

「ちょっと嬉しいです」

「違うと言ったら？」

「自分の殻に閉じこもりますね」

緋亜は、心にないことを言ってしまった。なんでだろう？

「どっちでもないって言ったら？」

「初めて会ったときみたいに接して欲しいです」

寛は一つ、息を吐いた。「俺は……緋亜のことが好きだ」

緋亜は目を硬く瞑った。なんとなく、分かっていた答えだったけど

戸惑う心はどうしようもない。

それとき。寛は続けている。「緋亜がどう思っても、俺の気持ちには変わらない。それと、緋亜に今すぐ答えを求めているんじゃないから。俺はいつまでも待つよ、緋亜が答えを言ってくれるまで」

「……分かりました」

緋亜は自分の言いたいことを言えなかったが、寛にそう言われて言うのをやめた。

言葉は、緋亜と寛を繋ぎとめた。

第6話・言葉（後書き）

読んでくださりありがとうございます
良かったら、評価をお願いします

第7話：バイト中

2回目の告白の次の日は、久々の晴天となった。もうすぐ、梅雨も終わりなのかもしれない。緋亜は朝からスーパーでバイトだった。『俺は緋亜のことが好きだ』

この言葉が、緋亜の頭から離れない。鎖で繋ぎとめられたかのように、離そうとしても離れないのだ。

『待つてるから』

この言葉と同時に、寛の顔が頭をよぎる。緋亜は頭を振った。

「私は、何をしに佐瀬町に来たんだろ……」

自分を変えるためだったのに、私はまだ、何もあの日と変わっていない。

寛を傷付けてまで、自分の意見を尊重したくもないし、自分を傷付けてまで、相手の意見を聞かなくてもいい。そう緋亜は思っているのに、世界はそんなに上手く転がらない。

緋亜は、大きく伸びをした。時計をぼんやりと眺めて、コンビニで買った昼食を食べる。

「もう、返事出そうかな……」

返事とは、寛に対することだ。怖いなんて、今は思っていない。

お弁当の中に、ハンバーグを見つける。大好物。ハンバーグを4等分し、口を大きく開けて昼食を食べきった。

「午後も、がんばるぞー」

やる気を注入した緋亜は、身なりを整えてから休憩室を去った。

「好きでした。付き合ってください……」

「……ああ」

緋亜の独り言。近くにいた人は、緋亜の行動を見て少し引いていた。

「うーん……。なんかしつくり来ないなあ」

ペットボトルを並べる。今日は同じような行動しかしていない。

「私も、寛さんのことが好きです……」

「サンキュ」

最後の一本を棚に入れて、空になったダンボールをたたむ。

「昼のメロドラマみたいじゃん」

突っ込み。ああ、きっと私は文才もなく、喋る能力もなく、考える能力もないんだな。

「じゃあ、こんなのはどうかだろう？ 手紙を寛の郵便受けに入れとく、とか」

それだ！ 緋亜はダンボールを叩いた。

なんだか、決まると嬉しくなる。

「今日は早く帰って、手紙を書こう！」

両手を挙げて、ガッツポーズをした。ダンボールが垂直に緋亜のつま先に落ちてくる。「うっ……」

夜。緋亜はつま先をかばいながら、バイトを終えて家へ帰宅した。

第7話：バイト中（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

今年も、皆さんに読んでもらえるような小説を書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2085d/>

この町で君に出会い

2011年2月3日16時18分発行